

東日本大震災における福島赤十字病院 DMAT 活動報告

日本 DMAT 隊員 脳神経外科部 副部長 市川 剛

～～～ 福島県救済のために参集いただいた多くの他機関に感謝したい ～～～

福島赤十字病院は震災発生日に DMAT を出動させ、私たちは南相馬市立総合病院へ向かった。南相馬市から津波にのまれた患者 2 名(溺水、外傷)を福島県立医科大学まで緊急搬送した。3 月 12 日の原発事故で、周辺からの避難者や被ばくに対する対応の必要性がでてきた。3 月 13 日には、福島県立医科大学において、初めての DMAT の統括業務を行った。

東日本大震災において福島赤十字病院DMAT(Disaster Medical Assistance Team)として救助活動に参加した。DMATとは、大地震等の災害時に被災地に迅速に駆けつけ、救急治療を行うための専門的な訓練を受けた医療チームである。発災直後にDMATの参集要請があった。当院自体も被災病院であったが、平日の日中であり院内に多くのスタッフがいたこともあり出動した。当チーム(医師1名、看護師2名、薬剤師1名、事務員1名)も県内の参集拠点である福島県立医科大学に向かった。発災当日に被災地域からは参集したのは、拠点である医大チームと当チームだけであった。情報収集の結果、市内での救護活動の需要はなかったが、南相馬市立総合病院に津波による多数の重傷者が居り、当チームは同院に救援・患者搬送へと向かった。同院のロビーには多くの患者が横になっており野戦病院のようであった。当時の詳しい状況は発災当時に同院で活躍されていた太田圭祐先生が著書にまとめている。当チームは翌朝までに2往復し津波にのまれた重傷者2名(溺水、多発外傷)を医大病院に搬送した。道路状況は、一部崩落した所もあったが大きな問題はなかった。しかし福島市内では渋滞に巻き込まれ、携帯酸素が底をつき肝を冷やした。

津波による被害は甚大で救出される生存者が少なく、12日で県内でのDMAT活動は収束すると思われたが、原発事故で状況が一変した。原発周辺からの避難者や被曝に対応する必要が出てきた。13日には地元のチームとのことでDMAT福島医大内本部にて統括業務を行った。DMATの統括は突然のことで戸惑ったが、日赤福島県支部と連携し、各避難所や被災病院の情報収集、避難者の対応等に当たった。13日夜に県内の他チームに統括を引き継ぎ帰院した。

今回は原発を有する県であるにも係わらず原発事故に対する備えや放射能に対する知識の欠如を痛感させられた。また本県救済の為に参集して頂いた多くのDMATや他機関には心より感謝したい。最後に、被災された方々にお見舞い申し上げるとともに今後も地域のために活動していきたい。